

生きることの表現を拡張する #1 -1「くだらないかもしれない疑問」

日時:2023年8月5日 19:00-21:00(日本時間)11:00-13:00(UK時間)

ゲスト:曾我英子さん

参加者:10名

内容:「生きることの表現を拡張する」1回目の今回は、曾我英子さんをゲストにお呼びしました。まずは「自己紹介パスボール」というワークで、参加者それぞれの「東京で好きな場所」と「今日持ってきたもの」をお互いに紹介しあいました。その後曾我さんから、問いや疑問が生まれ出る過程やきっかけ、そこから繋がっていく創造的な活動について、今までの取り組みやリサーチのお話と共にお聞きしました。後半は、「くだらないかもしれない」と思って口に出せない疑問について皆で話しました。そして持っている疑問や問いに対して答えを探す方法を自分なりに編み出すヒントとして、他のアーティストのリサーチのアウトプット方法が紹介されました。前半で行った「自己紹介パスボール」での「東京で好きな場所」と「今日持ってきたもの」、「くだらないかもしれない疑問」、そういった些細なきっかけから始まる探求について、考え始めるきっかけとなるワークショップでした。

目次

◎はじめに(曾我英子).....	2
◎自己紹介パスボール.....	2
◎曾我さんの活動紹介.....	5
◎くだらないかもしれない疑問.....	11
◎他のアーティストのアウトプット方法.....	14
◎次回の課題の話.....	17
◎次回予告.....	18



◎はじめに(曾我英子)

曾我) ロンドンから参加しています、曾我英子です。東京出身で、20年くらいイギリスに住んでいます。今はキングストン大学で講師をしています。2015年から北海道に通っていて、リサーチや制作をしています。今日は私ができるようにリサーチし、アウトプットしているかということをご紹介できたらと思います。また、後半は、問いをたてるきっかけになるようなワークをみなさんと行い、参考になる作品やリサーチ方法の事例などをご紹介できればと思います。

◎自己紹介パスボール

曾我) 初回なので、みなさんのことをもう少し知れたらと思います。ちょっとした自己紹介ゲームをしてみます。3つ、お題を書きました。ボールを用意したので、ボールをお互いにパスし、受け取った人がお題に答えていく感じでやってみます。

自己紹介ボールパス

ボールが回って来たら以下を言い、
次の人にボールをパスしてください！

- 1 パスめ お名前
- 2 パスめ 好きな東京の場所
- 3 パスめ 持ってきた物・写真など

深浦さん

好きな場所: 家の近くの野川です。

持ってきたもの: 写真を。銅版画をしていて、緑青刷りの研究をしています。ブログをみながら見様見真似でやっているのですが、部屋が緑青まみれになっています。これは葉っぱの形を写して、作ったものです。

キンバリーさん

好きな場所: もうないんですが、私が通っている一橋大の近くにあったカフェ。市民運動のビラが貼られたりしていて、その時は日本に来たばかりで外国人でも安全とを感じるような場所でした。

持ってきたもの: 「持続可能な魂の利用」という本です。大学卒業して本が読めなくて、でも最近読めるようになりました。下北沢のフェミニズムの本屋で買いました。最近入管で3、4時間ビザ更新を待っている時にこの本を読みました。

鈴木さん

好きな場所: 家の近くの多摩霊園。よく散歩をします。

持ってきたもの:2歳の子どもがいて、最初は子どもが頭に浮かんだんですが、それは今回は置いておいて、自分の身の回りで捨てられなかったものを持ってきました。大学生の時にタバコを吸ってて、その時についてきた缶です。当時はビスとかを入れていましたが、今日はその中にいろいろ入れてきました。1つは石です。石とか植物とかを拾うのが癖です。隕石みたいな形ですね。2つ目はサンゴです。サンゴに顔が書いてあります。10年ぐらい前に、絵を教える仕事をしていた時に、小学生の女の子が沖縄のお土産としてくれました。3つ目は、友人の喫茶店のバッジです。あとは緩衝材としてキャンバスの端が入ってます。

山本さん

好きな場所:潮風公園です。夜景がきれいです。

持ってきたもの:最近テート美術館展にいきました。そこでポストカードのセットを買いました。ターナー、リヒター、エリアソン、という感じで、好きなアーティストの絵ばかりだったので、これを持ってきました。

松田さん(飛び入り参加)

好きな場所:住んでいる場所、阿佐ヶ谷。旧町名は馬橋村。そこに住んで30年になります。

持ってきたもの:出来立てほやほやの小冊子です。住んでるところの写真を百数枚使って、写真集的な小冊子を作りました。今日のワークのことを知って持ってくるとしたら、父親の20代くらいの写真のアルバムを持ってきたのかな、とも思います。

芦沢さん

好きな場所:東京にある畑。大学の時に上京して、東京にも畑があるから、ほっとした。

持ってきたもの:このカメラです。写真を好きで撮っています。買うのに2年くらい迷って、その間にこのストラップを編みました。

坂本さん

好きな場所:国分寺にある定食屋さん「デメテル」。女性が一人で頑張ってる場所。店の中の雰囲気が好き。落ち着く感じがして、元気が出ます。

持ってきたもの:ナッツです。後半のワークのために。

なみさん

好きな場所:早朝の小金井公園が大好きです。最近は日中は暑いですが、朝5時半~6時に涼しい風を受けながら自転車を飛ばすのが好きです。

持ってきたもの:知り合いにいただいた熊谷守一さんの絵葉書。いただいた絵葉書を飾るのが好きです。最近あまりもらえないので、この一枚が最後の絵葉書です。送ってくれる人がいたら嬉しいです。

曾我さん

好きな場所:梅ヶ丘の羽根木公園。子供の遊べる広場があって、結構今時珍しい、ワイルドに遊べる場所です。

持ってきたもの:北海道様似町で拾った貝殻です。8ヶ月住んだんですけど、貝にまみれた生活でした。すぐに画材などの買い出しに行けるような環境でもなく、貝に絵を描いてみようかな、貝でものを切れるかな、とか、原始的な行動に自分を戻してくれたものでした。

宮下さん

好きな場所:パツと思いつかないですが、強いて言うなら学芸大の畑。

持ってきたもの:犬の写真です。いつもこの犬を連れて仕事に来ています。山に捨てられた犬を引き取りました。犬が苦手な人がいなければ、次回連れてこようかなと思います。

森山さん

好きな場所:山谷の簡易宿泊所の屋上で菜園を作っているのですが、そこから見る風景が好きです。

持ってきたもの:「つぶやきの政治思想」という本です。2019年にこの本に巡り会ったのですが、この本を読んで、その時の気持ちが腑に落ちたところがありました。今も好きな本です。



* キンバリーさんが持ってきたもの



* 鈴木さんが持ってきたもの



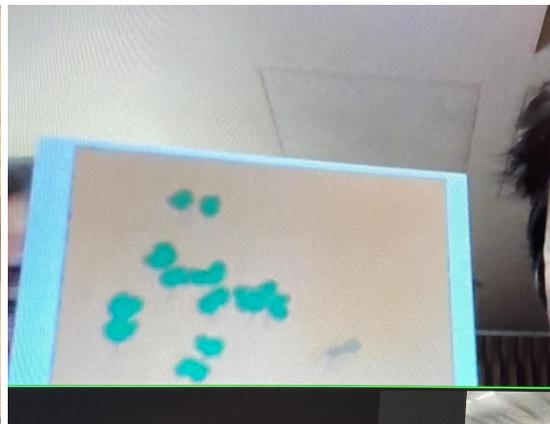
* 山本さんが持ってきたもの



* 深浦さんが持ってきたもの



* 芦沢さんが持ってきたもの



* なみさんが持ってきたもの

曾我)1つの小さなものや場所でも、リサーチをするきっかけになります。リサーチというと、大きな課題を想定しそうですが、身の回りの些細なことからリサーチをすることができるという感覚を持って、今後のワークショップに繋げていければと思います。

◎曾我さんの活動紹介



曾我さん)私はアーティストとして活動しているのですが、ものづくりのスタートは、「なんでだろう」とか「わからないことを知りたい」というところがきっかけなんです。アトリエは持ってなくて、家の外がリサーチやものづくりの場になっている事が多いです。

<北海道に通うようになったきっかけ>

何だか心地が良い音楽・知らなかった日本歴史＝なぜ！？



安東ウメ子 ウポポサンケ



Oki Kai Kai As To

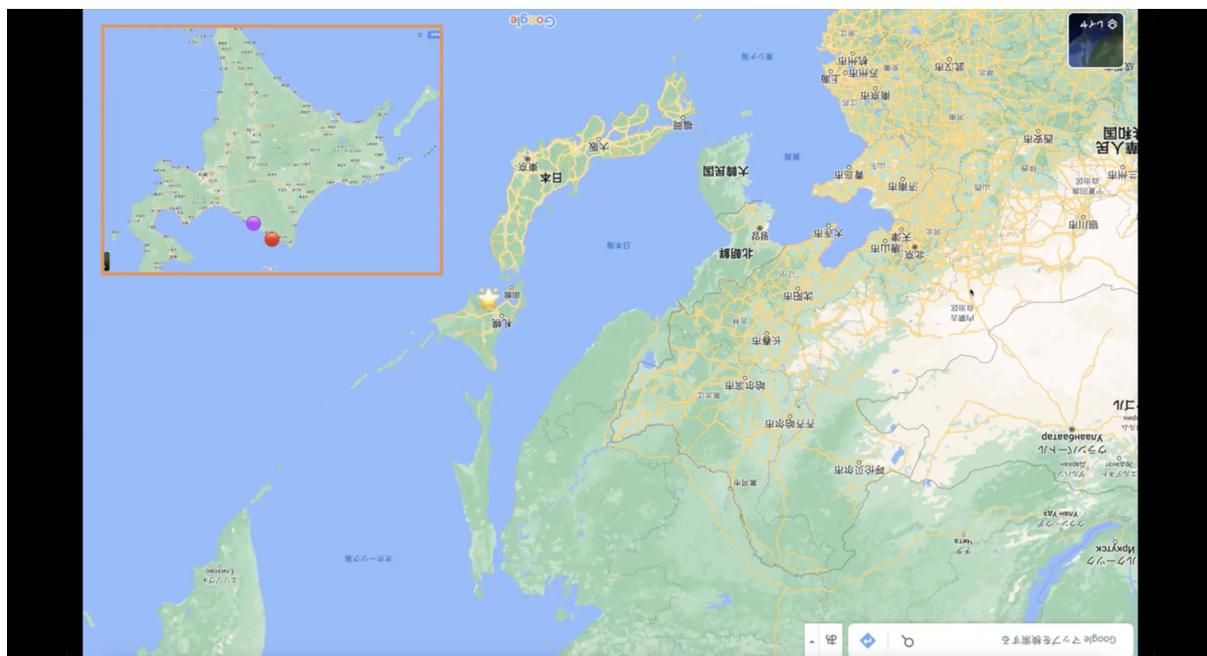
<https://www.youtube.com/watch?v=le7CWQ9Kh10>

曾我)2015年から北海道に通っているんですが、そのきっかけになったのがアイヌの音楽です。20代から長い間安東ウメ子さんのCDを聴いていました。アイヌ音楽はリズムが西洋音楽や日本の近代音楽と違う、なんだか分からないけど心地いい、と感じてきました。少し、聞いてみましょう。

[Kai Kai As To \(Rippling Lake\) \(2022 version\) /OKI](#)

曾我)これは、OKIさんがご家族でやっているバンドの音楽です。OKIさんが安東さんのアルバムをプロデュースしました。このような音楽を聴いていた私はある時から、言葉もわからないけど、なぜ心地よく感じるのかな、と深く考えるようになりました。聴き始めて10年経ってやっと私はアイヌの文化も日本との歴史も知らないな、ということに気づきました。その抱いた疑問をきっかけに、毎年北海道を訪れるようになりました。

<逆さまの地図>



曾我)このスライドでは敢えて地図を逆さまにしています。東京にいと東京が世界や日本の中心のように錯覚しますが、場所を移動すると、それが変わってきます。関東からいと北海道は遠い場所というイメージですが、北海道に行くと北海道が中心になり、世界の見方が変わってきます。ロシアや中国の方が近かったりして、自分の中の当たり前や、日本で受けた教育はなんだったんだろう、と視点が変わり始めたきっかけになりました。

<二風谷>



曾我)アイヌ文化の事を知りたいとなった時に、北海道に行って自分で勉強してみよう、と思いました。最初に行ったのが、札幌と二風谷の平取町というところでした。「民宿ちせ」に泊まりながら、博物館や図書館に通っていました。そこにはシャケの皮でできたものが飾ってありました。そこから「なんだろう」「なぜだろう」がどんどん湧き上がってくるんですね。川に降りていくと、シャケがたくさん泳いでいました。自分が知っているシャケはスーパーで買うパックの中のお寿司のようなものでした。他の生き物達の邪魔にならないように川に入ってシャケに囲まれていると、自然の循環を一瞬見ることができました。普段の人工的な生活と自然がどれだけ切り離されているのかを感じることができるきっかけでした。

曾我)博物館ではガラス越しにしか見る事ができないので、触る事ができなかったシャケの靴ですが、シャケを川で見た後に、靴を触ってみるには、自分で作ってみるしか無いと思いました。二風谷のお婆さんに相談をしたところ、1年後の秋に戻っておいで、と言われました。ですが、残念ながら1年後に戻ったらやっぱり教えることはできないと言われてショックを受けました。ですが、私は和人という立場で、アイヌの人たちからすると侵略者側の人間ですので当たり前です。教えたくても技術を持っているお婆さんが歳をとって体力的に教えられない、という現状などにぶち当たる体験をしました。自分はどれだけ無知だったのか、その時恥ずかしく感じました。地元の人がまずは着物作りから習えば良いのではないかと提案して下さりました。そして着物作りのクラスやアイヌ語クラスに参加して、地元の人々との関わりからアイヌ文化を学びました。

曾我)3ヶ月くらい二風谷に住んで、秋はシャケにまつわる様々な状況を学びました。最終的にシャケの皮を使って靴を作るワークショップに参加させていただきました。そしてその3ヶ月の体験を元に、自分でシャケの靴を作る映像作品を作りました。この作品では、外の者がアイヌの人々の社会に関わっていく過程や、人々や文化との関わり、新しい発見、なんだろうと思った疑問を詰め込んだ作品になりました。それを2021年にピットリバーズ博

博物館で展示しました。140年前にできた博物館で世界中から集められた民具が飾ってある博物館です。アイヌの民具も300点くらい収められていて、その中にシャケの靴もあります。

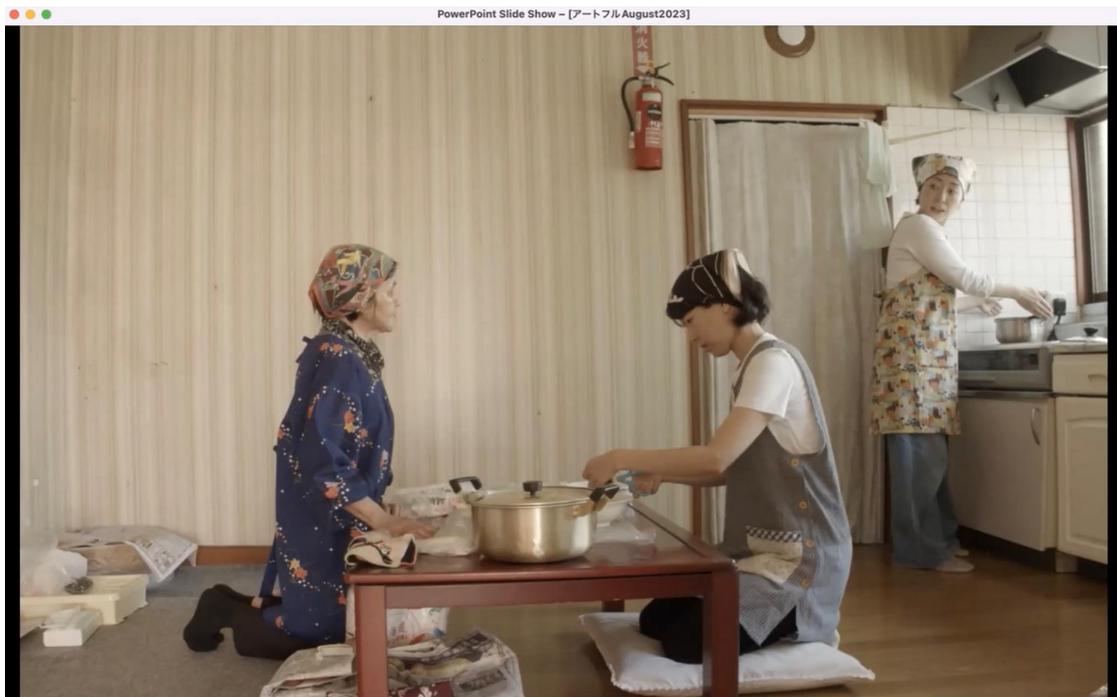
<アイヌハンター モンちゃん>



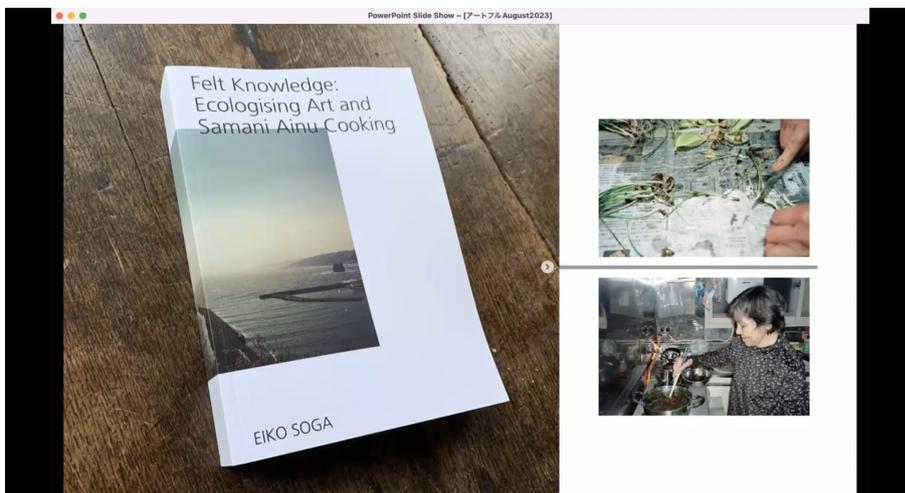
曾我) そんな活動をしている中で、門別徳司くん、モンちゃんという人と友達になりました。

アイヌのハンターをやっています。アイヌの方法で狩猟している人は今は珍しくて、BBC でも取り上げられたんですが、ニュースで取り上げられるモンちゃんは、私が知っているモンちゃんとは違う感じがしました。メディア報道の中では、アイヌの人たちが私たちとはちょっと違う人、独特な人種、という捉え方がされていて。普段はただの友達として遊んでいるので、なぜ、こういった差別的な捉えられかたをされるのか、という疑問や気持ちが湧いてきました。そこで、モンちゃんが狩猟に行く時に同行して、その様子をビデオに撮ってみました。

<熊谷カネさん>



曾我)2020年は様似町に8ヶ月ほど住みました。熊谷カネさんというアイヌのおばあちゃんに四季折々のアイヌ料理を学びました。昔はどういうふう自然環境を生かしてそれが人々の生活につながっていたのか、興味があって、一緒に活動をさせていただくことにしました。熊谷さんは動物や植物に声をかけます。人間と人間以外が平等という価値観を今でも持っている方でした。世界の見方がさらに変わった経験になりました。



曾我)そんな体験を映像作品にしたり、北海道の活動を博士論文の一部としてまとめました。論文といっても写真集のようなものを、アウトプットとして作りました。

<問いを助けてくれたもの>



曾我)2015年からの過程の中で大事にしていたのは、アイヌ文化を研究する中川裕先生の本「語り合う言葉の力ーカムイたちと生きる世界」です。自分の中の「なぜだろう」という問いを助けてくれました。書き文字を持たない文化、口承文化がどのように成り立っているのか、ヒントをくれるような本でした。

<参加者からの質問>

キンバリー)フィールドワーク中はどこに住んでいましたか？

曾我)二風谷にいた時には着物作りを教えてくれた貝澤かつえさんが民宿チセをされていて、そこに住んでいました。様似町では熊谷さんのところから徒歩3分のところ。山菜取りに行こう、昆布取りに行こう、と熊谷さんが言った時にすぐに行ける距離に住んでいました。ほぼ毎日一緒にいました。

キンバリー)結局シャケの靴作りは教えてもらえなかったんですか？

曾我)3ヶ月もいるとなんとなく本気らしいと認めてもらって、地元の方々に教えてもらえました。

キンバリー)北海道でも多文化共生の博物館があったり、それもまたアイヌの人の声を代弁してしまう可能性がある。そういう本土と北海道との歴史とか、そういう複雑な部分が、実際に曾我さんが皆さんと行動してみて、アイヌの人が実際どう考えているのか知りたい。

曾我)多文化共生は簡単ではないと思います。アイヌの人々と活動していても、私はアイヌの人の声を代弁できるわけでもない、私がアイヌになるわけではない。ただ、近くの文化に住んでいる人として、どうやって未来を一

緒に考えられるか、自然環境と人の生活がどのように調和していく可能性があるのかに興味があります。そういうことをどうやって一緒に考えられるか、という立場でアイヌの方たちに接させていただいています。

鈴木) 作品とかアウトプットに対して、イギリスやヨーロッパの人のリアクションはどうでしたか？

曾我) シャケの皮はサーミの人やロシア、中国の先住民族の人が使っていたので、世界との繋がりが浮き彫りになり、別文化の人々と繋がるきっかけになりました。また、イギリスで言うと、日本に先住民族の人がいることを知らなかったという意見が多かったです。

◎くだらないかもしれない疑問

曾我) 大体私のリサーチの始まりは、みんな知ってるかなあ、とか、知らないのは私だけかも知れない、と思いつながらも興味が止まらずに、リサーチにつながっていきます。



曾我) 熊谷さんと山菜取りをしていると、山菜は美味しいけれど、土も健康でないといけないんだな、と体を感じるようになって。土って食べられないのかな、と思うようになりました。樺太アイヌの人たちも土を使ってスープのような料理を作っていたそうです。

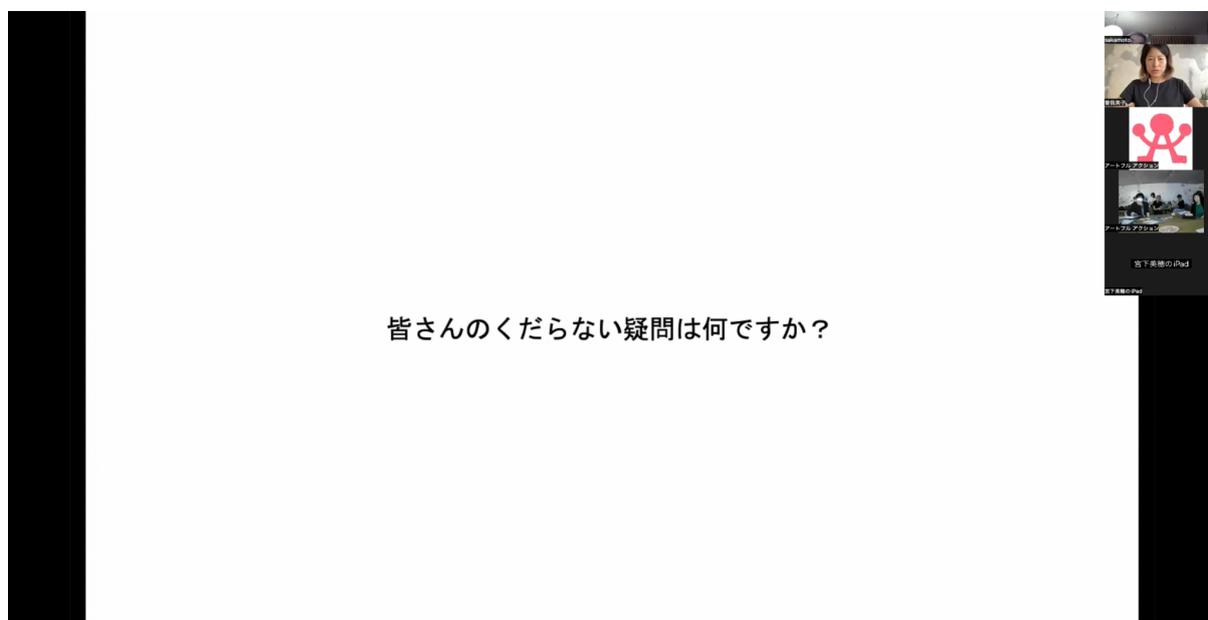


曾我) 熊谷さんと活動を行っているうちに、土環境の事を考えるようになりました。今は化学肥料や環境汚染の影響を受けている土が多いですが、植物を口にすることで、土の健康を考える事は大切なのではないかと思います、深く知りたくなりました。そんな時に去年Documenta15*に行き、インドネシアのジャティワンギアートファクトリー

が土を使ってクッキー、パン、ケーキを作るアート作品を見ました。そしてそのメンバーに出会いました。そこで土を食べるという文化はアジアやアフリカでは近年まで割と一般的にあったと学びました。そんなことをきっかけにジャティワングのメンバーと土に関するリサーチ兼アートプロジェクトを立ち上げることになりました。最初の「なぜ？」という疑問が繋がりを作ってくれたのです。*ドクメンタ:ドイツのカッセルで5年に1度行われている現代美術の大型展覧会

<皆さんのくだらない疑問は何ですか？>

曾我)次はみなさんにもお聞きしたいなと思います。みなさんは、くだらないかもしれない、と思って、口に出せない疑問とかありますか？



宮下さん:馬を飼いたいと考えています。馬がいて、そこからどんな暮らしができていくかな、と考えたいと思っています。みんなからは、また言ってるよ~と言われるんですが。

鈴木さん:転んで頭をぶつけました。朝から痛くて、保冷剤を頭に乘せてそれをヘアバンドで押さえていました。結構面白い感じだったんですが、子どもは怖がりました。その状態でベランダに洗濯物をとりに行ったんですが、真ん中に庭がある集合住宅で、対面に住んでいる人に躊躇しました。お向かいさんで丹念にタンニングする人がいるんですね。それを見たら、睨まれました。そういう距離感って何が正解なのかな、と疑問に思いました。

坂本さん:くだらないと思っていないんですが、最近庭からみみずがいなくなりました。今まで掘るとたくさん出てきたんですが。近所の農家に聞いてみたら、そういえば、みみず、あまりみないねと言っていました。

山本さん:美術専門じゃないですが、美術と関わる事が多く、アートがあるってどう言うことなんだろう、とか、アートと人間の関係ってなんだろう、と思ってます。

キンバリーさん:くだらないとは思わないけど、人へのヘイトがなぜあるのかわからない。表現の不自由展を国立でやっていて、それに対して出ていけ、とか言われたり、アクティビストがサイバー攻撃を受けたり。ヘイトがどこから、なぜ生まれるのか。そういうものはあるんだよ、とわりきって言う人もいるけど、なんであるんだろう、ってずっと考えちゃう。

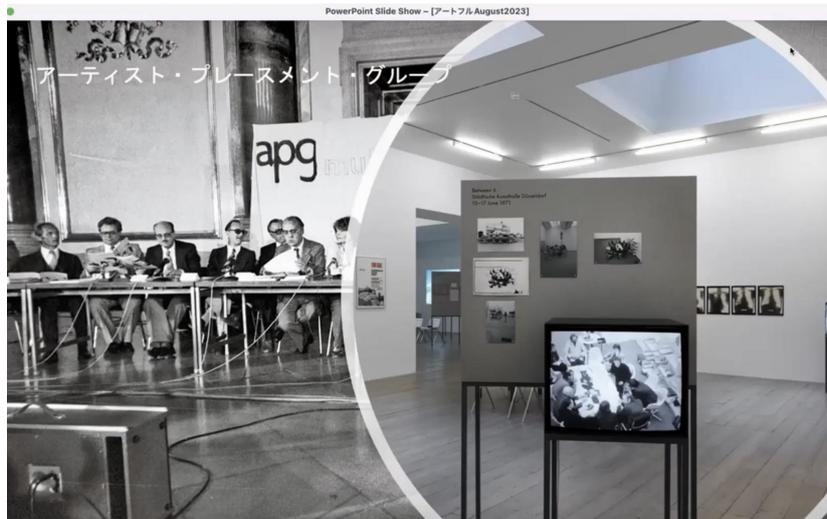
曾我)ちょっとした疑問を口に出すことが難しいかな、と思い「くだらないかもしれない」という言葉をつけて、今回問いかけてみましたが、みなさんがくだらないと思っていなくて、その疑問を聞いて良かったです。

◎他のアーティストのアウトプット方法

曾我)リサーチということなので、他のアーティストがリサーチをどのようにアウトプットしてきたのか、さらっと紹介したいと思います。

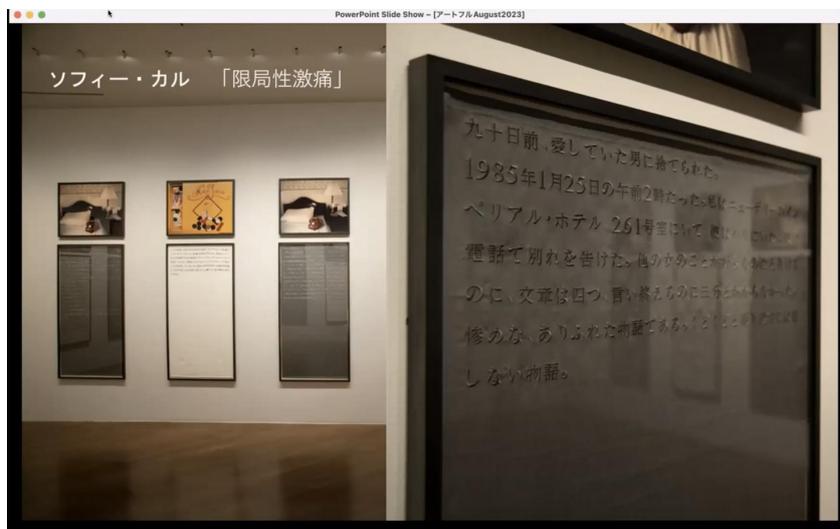
・アーティスト・プレースメント・グループ

アーティストがあえて政府機関に務めたり、大企業に勤めたりしながら、社会問題を内側から変えていくを試みた。会社の中での仕事や、人とコミュニケーションしたことを展覧会で発表した。



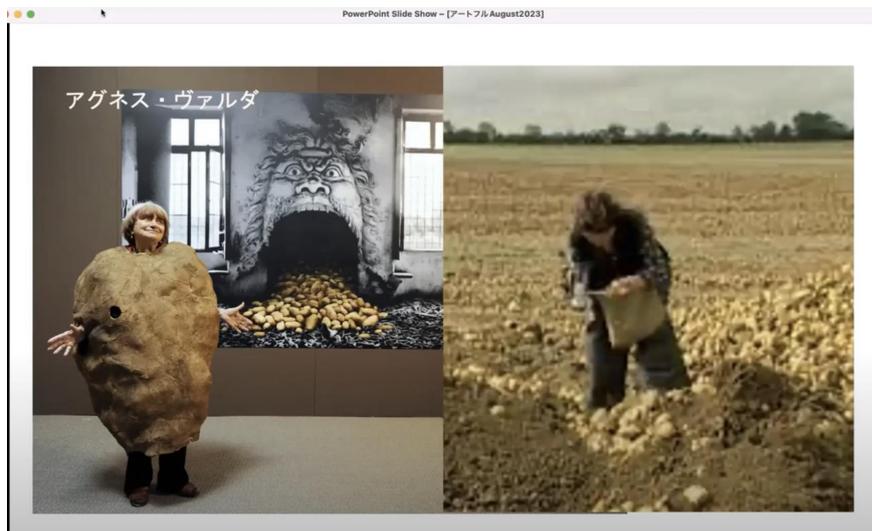
・ソフィ・カル「限局性激痛」

ソフィ・カルは1970年代から、文字と写真を使って実験的な作品を作ってきた人。パリの街で知らない人を尾行したり、知らない人を家に招いてアンケートをしたりしていた。「限局性激痛」は大好きな人とお別れした人の体と心の痛みを表現した作品。自分の日記を使って心が変化していくことを表現した。社会のリサーチというよりは自分の心や体の変化に着目をしてリサーチをしている。



・アグネス・ヴァルダ「落穂拾」

綺麗な形じゃないなどの理由で売れなくて畑や野菜マーケット後に散らばっている野菜を拾う人たちを追って撮った映像作品。野菜を通して、食の流通がどのように成り立っていて、それが様々な暮らしをしている人たちの生活と繋がったり繋がらなかったりしているのか、を追った作品。



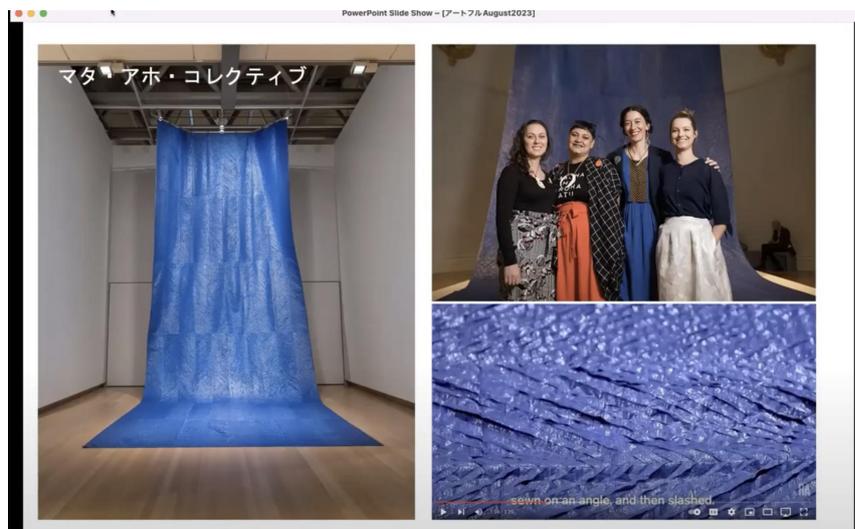
・マザーバンク

インドネシアのアーティスト集団。お母さんたちを中心に、アート活動として銀行を立ち上げた。銀行からお金を借りることができるけど、利子はお金ではなくて、クリエイティブな活動で街に還元していくという仕組みを作った。キャッサバという芋を使って新しい商品を作って利子を返したり、お母さんたちのバンドを作ってライブをしたり、お金の新しい在り方や使い方を編み出している。お母さんと呼ばれる女性達が活躍している活動。



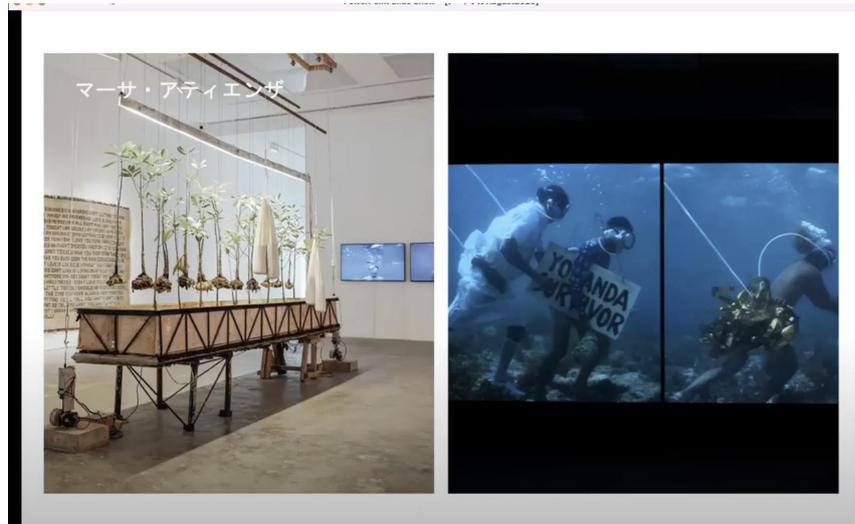
・マタ・アホ・コレクティブ

ニュージーランドの先住民のコレクティブ。タニワというマオリ族の神話に出てくる、海に住んでいる神様をリサーチして表現した作品を作っている人たち。



・マーサ・アティエンザ

フィリピンのアーティスト。海の汚染がマングローブや、土にどのように影響しているのかりサーチして、作品にしている。



曾我)みなさんに、自分が持っている問いに対して答えを探す方法を、自分なりに編み出してほしいと思ってご紹介しました。

◎次回の課題の話

曾我) 次回までにしてきてほしいことをお伝えします。今日発表していただいた、東京の中で好きな場所だったり、みなさんに持ってきてもらったものを深掘りしてほしいなと思っています。場所でもものでも、自分以外、人間以外の目線で見たらどんな風景が見えるのか、考えてきてほしいと思います。例えば、近所にある川が好きというふうにおっしゃっていましたが、その川に住んでいる虫にとっては川はどんな存在なのか？考えて来てもらって、発表してほしいと思っています。発表方法は写真でもいいし、語りでも、映像でも良い。坂本さんの場合、可能だったら、何故みみずがいなくなったのか、とか調べてほしいなと思っています。

◎次回予告

曾我) ソニックメディテーションの活動を行っているハナとスティーブンをゲストとして呼びます。ソニックメディテーションとは、ポーリン・オリビエロスというアーティストが発案したエクササイズですが、その活動を引き継いで彼女の瞑想方法を広めている二人組を招いてワークショップをやってもらう予定です。

曾我) リサーチというと図書館や博物館に行くということが多く行われていると思うのですが、外の情報じゃなくて、自分の身体を使ってどのようなリサーチできるのか、体感がどういふ情報や知識を私たちに与えてくれるのか、知るためのワークショップをしてみます。楽しみにしてください。



(おまけ: その日皆で飲んだハーブティーのハーブの残り)